

『「一つの言葉」』

粉河中学校 2年 林 明日香

人間は毎日言葉を使う。例えば、友達と雑談をしているとき。あなたは何気なく相手とコミュニケーションをとっている。そして、その会話を「楽しい」と感じているのではないだろうか。感謝されると「嬉しい」と感じ、怒られると「悲しい」と感じる。このように、相手からの言葉に一喜一憂することは、誰もが経験していることだろう。

私は、言葉で誰かを元気づけたり、支えられる人になりたい。そして、どんなことが起きても、前を向いて歩いていけるようになりたいと考えている。そんな目標を持つようになったのは、ある出来事がきっかけである。

「何でできないの。」「他の人はできているのに。」「あのの方がすごい。」小学生だった私は、できないことや苦手なことを見つけては、誰かと比べて落ち込む日々を過ごしていた。以前は、誰かと比べて落ち込むのではなく、その人に憧れを抱いていたはずだったのに。テストの点数が低いと、100点だった友達に憧れ、勉強を頑張っていた。習い事でも、周りの人に憧れを持って練習を重ねていた。だが、思ったように物事が進まず、「こうなりたい」という理想になれない自分が悔しかった。何をやるにしても完璧を求め、その通りにいかなかったり、失敗するたびに理想の姿から遠ざかっているような気がした。そんな自分に嫌気がさして、私はどんどん自分のことを嫌っていった。

6年生の終わりにさしかかった頃、楽しみにしていた卒業アルバムが届いた。

卒業が間近に迫った3月、届いたアルバムに友達や身近な人から沢山のメッセージをもらった。「卒業おめでとう」「頑張ってたね。」ページいっぱい書かれた私への言葉に、大きな勇気と元気をもらっていた。その中で、ある一言が目にとまった。ページの端、「もっと自分を大切にしてくれ」という言葉。先生からもらった、1つの言葉。この言葉を見た瞬間に、自分は駄目だという考え方が自分を追いつめていたのだと、やっと気づいた。誰かと自分を比べて落ち込む必要なんてない。全てのことに完璧を求めなくてもいい。そう思うと、気が楽になった。その言葉に、心が救われたような気がした。

それから私は、この経験を大切にして、先生のように周りの人の助けになりたいと思うようになった。そして、それを実現するために、まずは自分の言葉遣いを見直してみることにした。すると、「うざい」「最悪」など、自分は冗談で言っていたつもりだったが、受け取り方によっては相手が傷ついてしまう言葉を使っていたことに気付いた。このままでは、人の助けになるどころか、人を悲しま

せてしまう。理想に近づくためには、自分を客観的に見ることが大切だと考えた。その第1歩として、相手を否定する言葉や消極的な言葉を使わないように心掛けていこうと思う。このまま少しずつ努力していけば、いつか言葉で誰かを助けられる日がくると、私は信じている。

今、私はとても楽しい学校生活を送っている。それは間違いなく、先生からの言葉があったからだと思う。言葉には、人の考え方や感情を大きく変化させる力がある。そう考えるきっかけをくれたのも、先生からの言葉だった。

SNS上での誹謗中傷やいじめが後を絶たない昨今。軽い気持ちで放った一言でも、時には刃物となり、相手を傷つけてしまう。言葉によって悲しむ人を増やさないことや、言葉を誰かのために使うことが大切だと、私は考える。私たちに必要なのは、言葉が持っている力を理解し、その力を正しく使っていくことなのではないのだろうか。

